

学校と家庭

真理 ・ 感性 ・ 実践

平成29年 6月 1日発行

さいたま市立岸中学校・岸中学校PTA

<http://kishi-j.saitama-city.ed.jp/>



第403号

「岸中 前へ！」

さいたま市立岸中学校
校長 星野 貞邦

校庭の木々の緑も一段と深まり、日に日に暑さを感じる季節になりました。

学校では、教育相談期間、PTA総会や生徒総会等も終り、今週末から始まる学校総合体育大会に向け、運動部の生徒は一生懸命に練習に励んでおります。3年生にとっては中学校生活最後の公式大会となりますので、3年間取組んで来たそれぞれの思いを胸に「自分を信じて、友を信じて」精一杯のプレーを期待しております。また、保護者の皆様におかれましては、生徒たちの頑張っている姿を褒めていただき、会場に赴き応援をしていただければと思います。

さて、運動部の大会が近づくといつも思い浮かべる言葉があります。それは「前へ」という言葉です。この言葉は、95歳で亡くなるまでの67年間、明治大学のラグビー部監督として人生をラグビーに捧げた故北村忠治監督の言葉です。明治大学が勝てなかった時代、マスコミなどから「時代遅れ」「化石」とたたかれた時も「逆境でこそ基本が大切」と言って、基本に忠実な戦略を通し、「明治 前へ」と言って明治のスタイルを貫き通しました。北島監督は本の中で次のように語っています。

『僕の方針は、「たとえ目の前に15人の敵がいようとも、ひるまずに突進せよ。」、もちろん常識的に考えて、15人を相手にどんなに豪快に突進してもつぶされることはわかっている。しかし、突進してつぶされないために毎日毎日、己を鍛えて突進力を磨いているんだ。そんなことをしなくても、ステップのひとつも覚えれば、楽に相手をおかわすかもしれない。しかし、ラグビーの本質は、ぶつかり合いのスポーツ、ぶつかり合いで勝てない奴がステップを覚えても、ラグビーの本質からはずれているような気がするんだ。突進してあたれば痛いし、怪我もする。うまい具合に相手をはじきとばせばいいけれど、そんなときばかりではない。何度も何度もつぶされては這い上がり、またつぶされては立ち上がる、そんな繰り返しでも、確実に一歩ゴールに近づけばそれでいい。長い人生だから、数多くの障害物にぶつかるだろう。かわすことによって乗り越えられる障害物ならいい。しかし、本当に深刻な問題に直面した時は、体当たりで乗り越えていくしかない。そこには常日ごろから、何事にも体当たりで進むように心がけていなければならないと思うんだ』

私は、「前へ」という単純明快な言葉でありながら、人生の方向性を示してくれているこの言葉が大変好きになりました。

また、「いつの時代も勝利の本当の立役者は、ユニホームを着ることができた者よりも、一度も試合にでることなく卒業していった部員たちだと思っている。4年間、一度も陽に当たることなく、常に縁の下でチームを支えてくれた部員たちこそが本当の勝者であると信じている」とも語っています。

～学校総合体育大会「岸中 前へ！」～